令和8年度

小中学生の日常生活（ヤングケアラー）に関する
アンケート調査報告書

茅ヶ崎市

こども育成部こども育成相談課

1 調査概要

(1)調査の背景・目的

家庭内において、病気や障がいのある家族のケアを日常的に担うこどもたちは、学業や心身の健康、社会性の発達などにおいて、支障をきたす可能性があります。しかし、その実態は十分に把握できておらず、当事者も自覚していないことで表面化していないケースも多くあります。

本調査は、家庭生活におけるお世話をすることでの悩みや困りごとなどに対するアンケートを実施することで、こども自身がヤングケアラーへの理解を深め、自分自身の気づきを促すとともに、表面化しづらいヤングケアラー(疑いを含む)の実態を把握するため、昨年に引き続き実施しました。

また、任意の記名式としたことで、困りごとを抱えたこどもを個別に把握し、相談支援につなげることも目的としています。

なお、質問に対する理解力が備わる学年で、実際にヤングケアラーが顕在化しやすく、調査として信頼できる回答を得やすいことから、対象を小学5年生から中学3年生までとしました。

(2)調査対象者

茅ヶ崎市内の市立学校に在学中の小学5年生から中学3年生までの児童・生徒(全32校)

	対象者数	回答数	回答率	実施校
小学生(5・6年生)	4,332 人	3,851 人	88.9%	19 校
中学生(1～3年生)	5,958 人	5,167 人	86.7%	13 校
合計	10,290 人	9,018 人	87.6%	32 校

(3)調査方法

市立小学校・中学校にて、アンケートを実施する前に児童・生徒向けに「ヤングケアラー」に関する説明を行い、タブレット端末を使用して Web による記名式(任意)アンケートを実施。

(4)調査期間

令和8年6月29日～7月10日

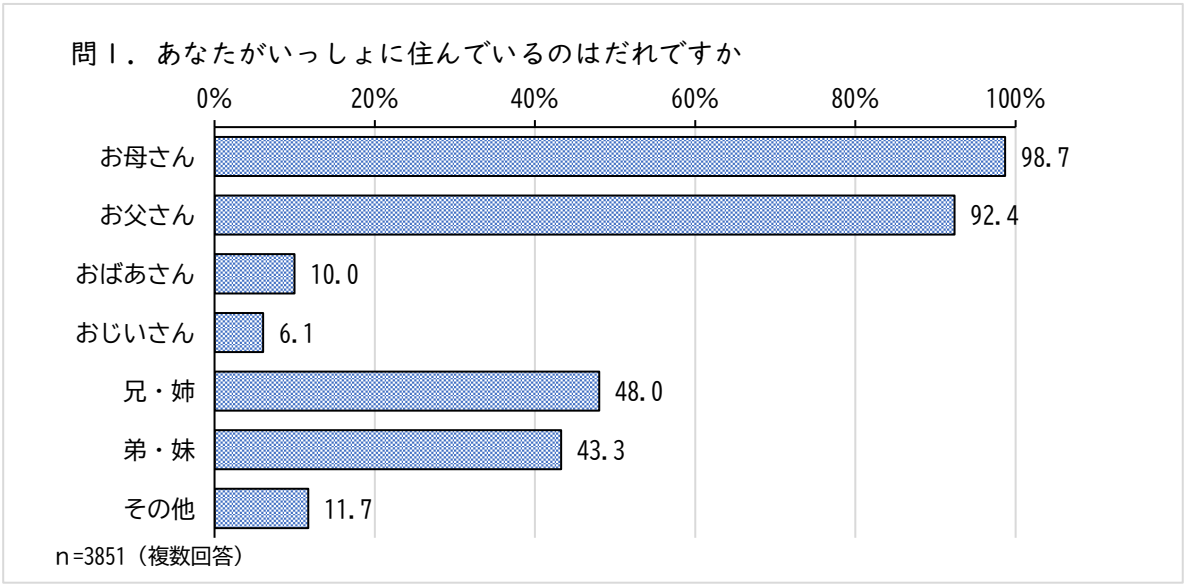
(5)表示について

・グラフ中の(n=〇〇)という表記は、その項目の有効回答者数で比率算出の基礎となります。
・複数回答の項目については、原則として、その項目に対しての有効回答者の数を基数とし、比率算出を行っているため、比率計が 100%を超えることがあります。
・比率は、小数点以下第2位を四捨五入しています。

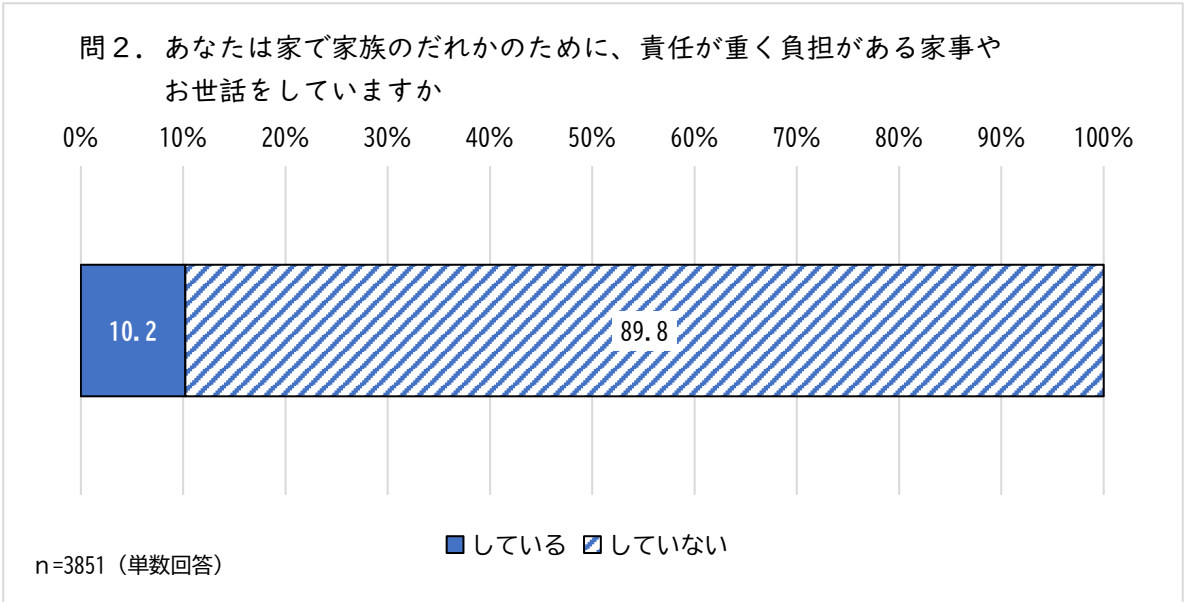
(6)調査結果

小学5年生・6年生.....2
中学1年生～3年生.....7
考察.....12

■小学5年生・6年生



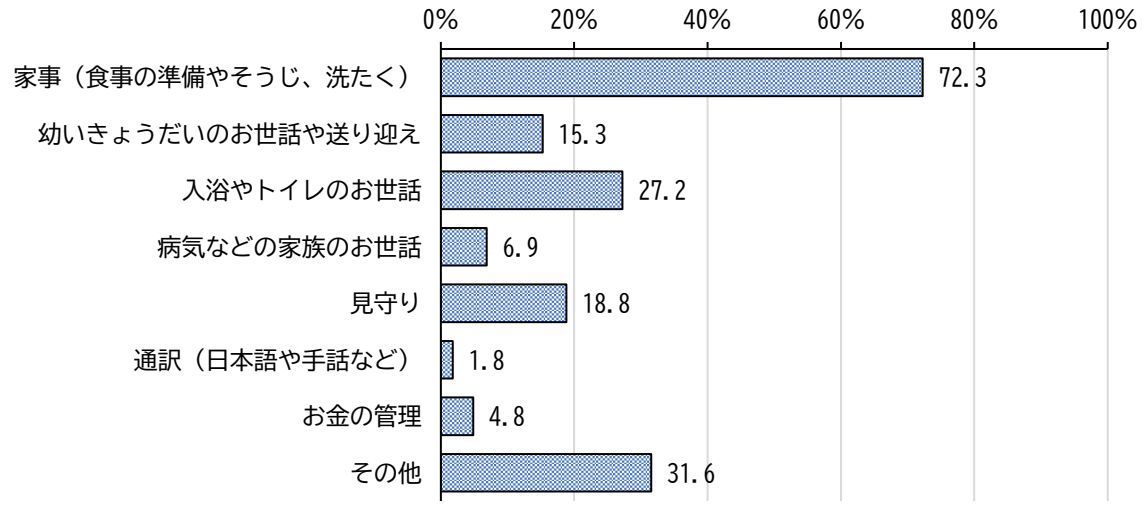
小学５年生・６年生の児童の同居家族は、両親、特に「母親」（98.7%）と「父親」（92.4%）が中心となっています。また、「兄や姉」（48.0%）と「弟や妹」（43.3%）も顕著で、兄弟姉妹がいる児童が約半数を占めています。



全体の 10.2%（393 人）の児童が、家族のために家事やお世話をしていると回答しました。これは、小学 5・6 年生の約10人に１人が何かしらかのかたちで家族の家事やお世話に関わっていることになります。

以下の設問は、家事やお世話をしていると回答した 393 人に行いました。

問３．あなたはどのような家事やお世話をしていますか

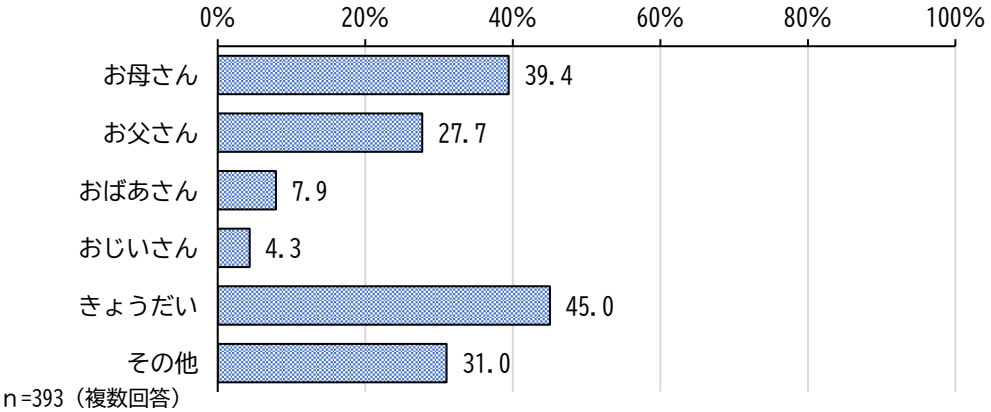


n=393（複数回答）

お世話の内容のうち、「家事(食事の準備やそうじ、洗濯)」(72.3%、284 人)が多くなっており、そのほか「入浴やトイレのお世話」(27.2%、107 人)や「見守り」(18.8%、74 人)、「幼いきょうだいのお世話や送り迎え」(15.3%、60人)といったものが主になっています。

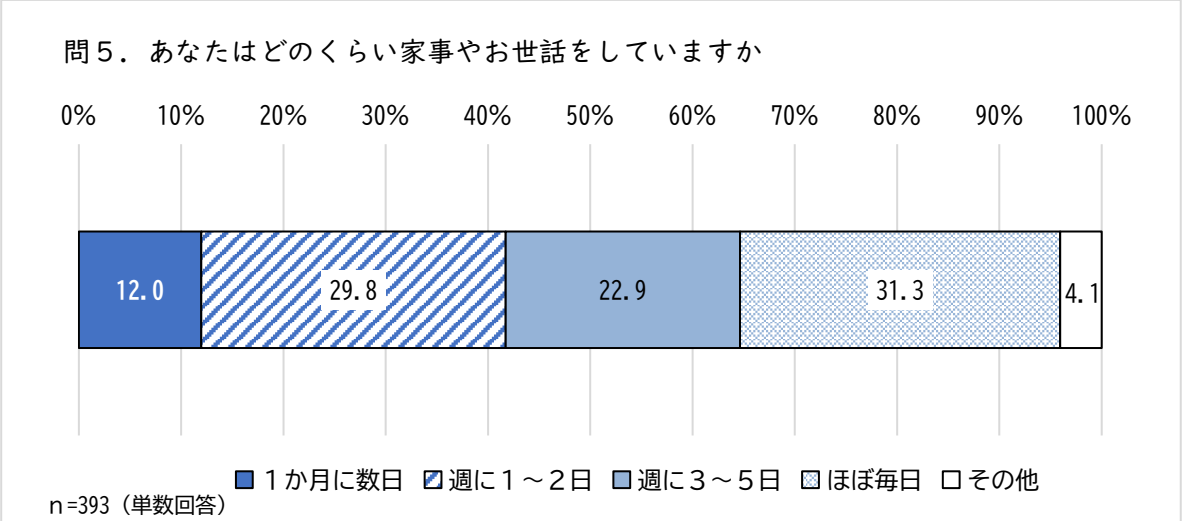
これらの結果では、小学 5 年生・6 年生が担っているのは、日常的な家事が中心となっています。

問４．あなたがお世話をしている人はだれですか

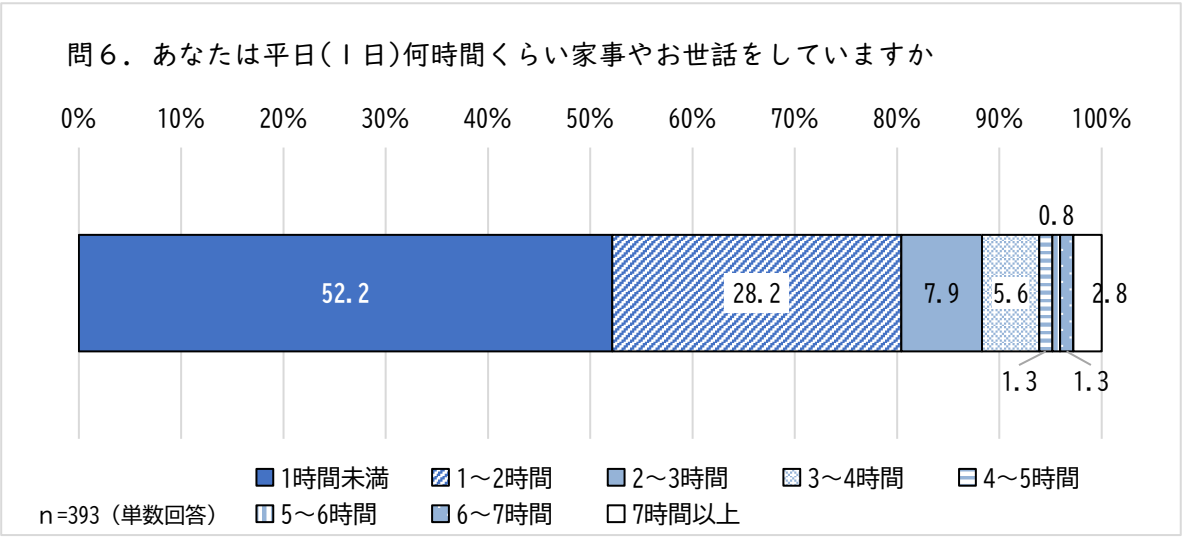


n=393（複数回答）

お世話の対象は「きょうだい」(45.0%、177 人)が最も多く、次いで「母親」(39.4%、155 人)、「父親」(27.7%、109 人)となっています。児童が親の代わりにきょうだいの面倒を見る、見守りをする、あるいは親自身の家事等を担うケースがあげられます。

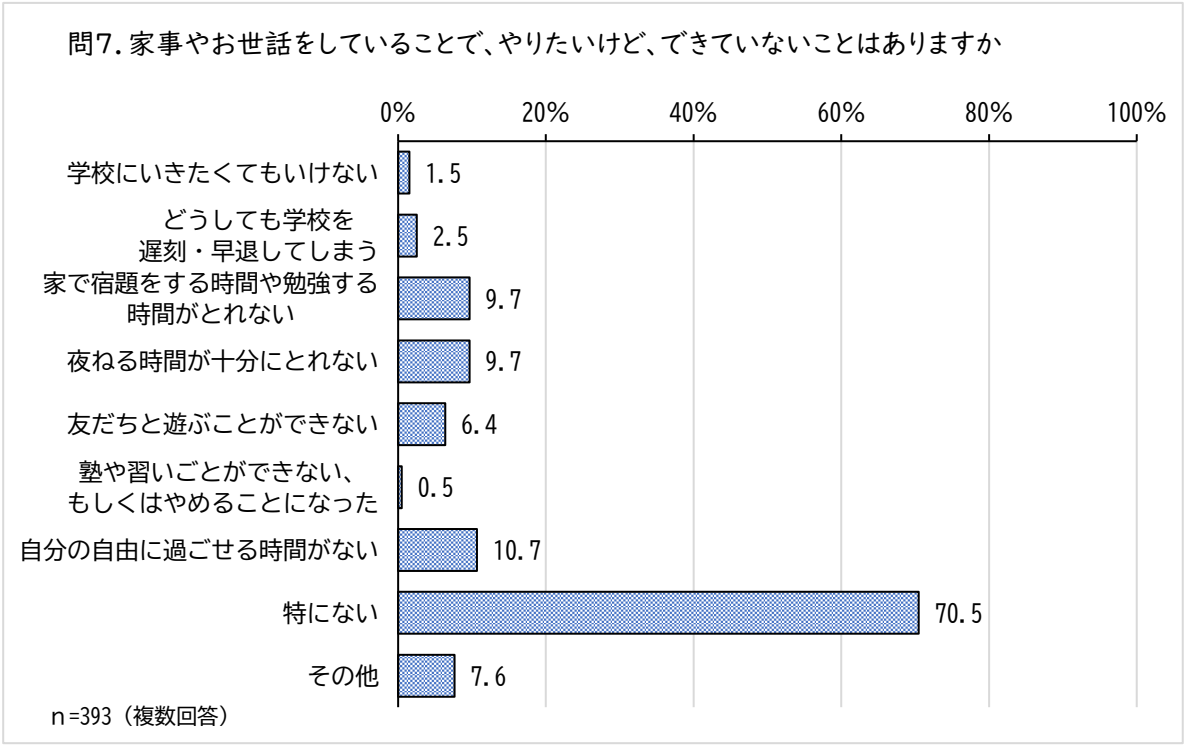


お世話をしている児童のうち、約３人に１人(31.3%、123人)が「ほぼ毎日」家事やお世話をしていると回答しています。1日に行う時間数が少なく、お手伝いの要素が強いものも含まれている可能性がありますが、日常的な役割になっていることがうかがえます。

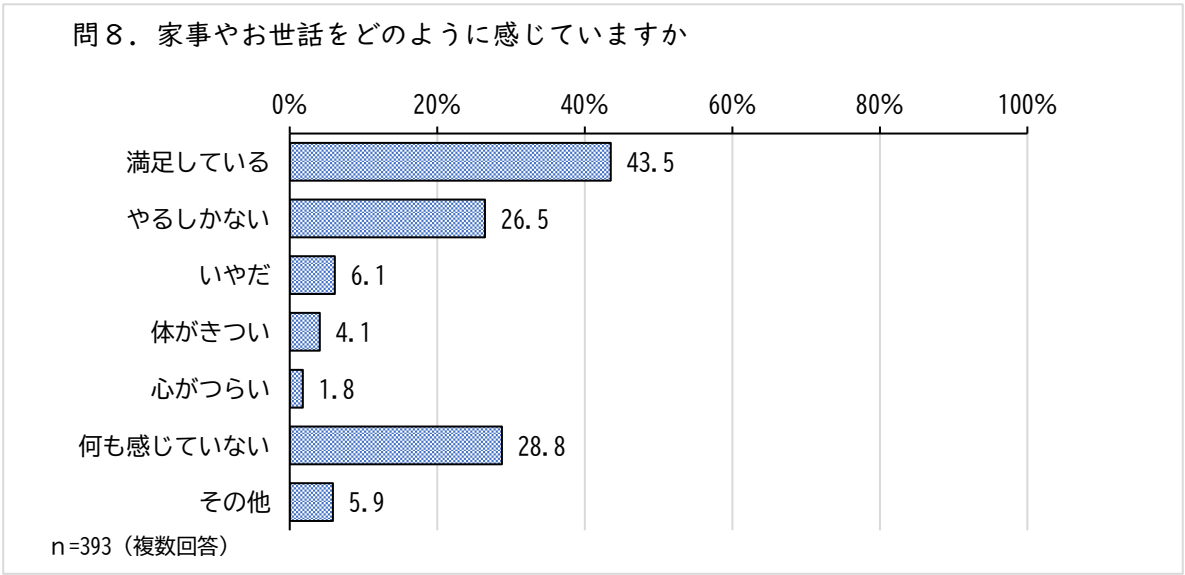


最も多い回答は「1 時間未満」(52.2%、205 人)でしたが 、「1～2 時間」と回答した児童は28.2%(111 人)いました。一方で、お手伝いやお世話に費やしている時間が2時間以上の児童は19. 6%(77 人)になっています。

また、一部の児童は「6～7 時間」(1.3%、5 人) や「7 時間以上」(2.8%、11 人) と回答しており、個々の負担の程度には大きな開きがありました。

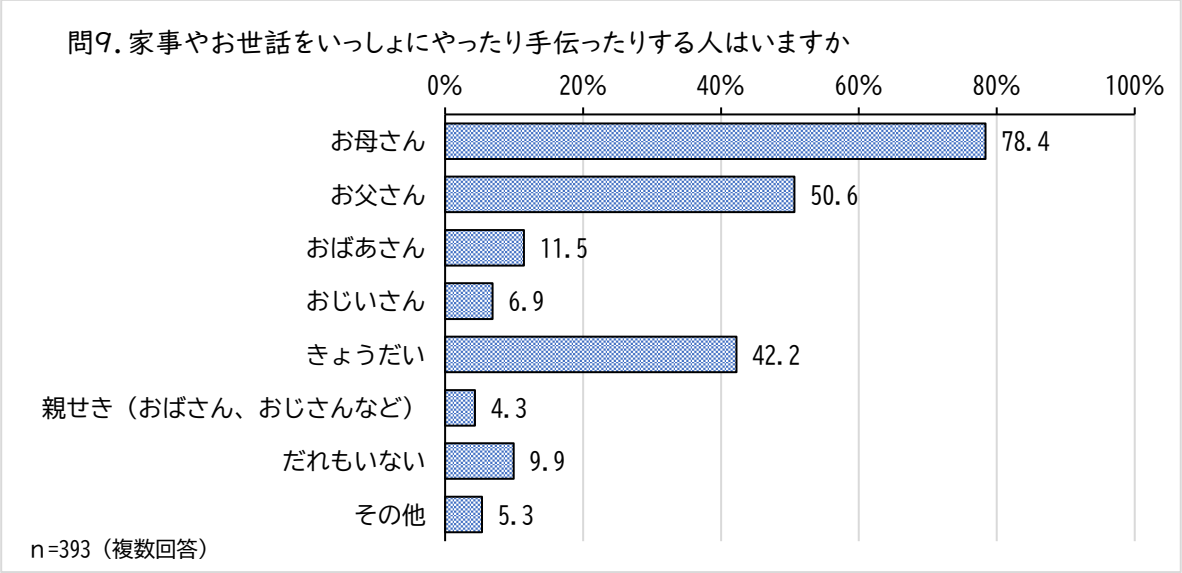


全体の 70.5%（277 人）が「特にない」と回答しています。一部の児童は「自分の自由に過ごせる時間がない」（10.7%、42 人）、「家で宿題をする時間や勉強する時間がとれない」（9.7%、38 人）、「夜ねる時間が十分にとれない」（9.7%、38 人）といった何かしらの困難を感じています。

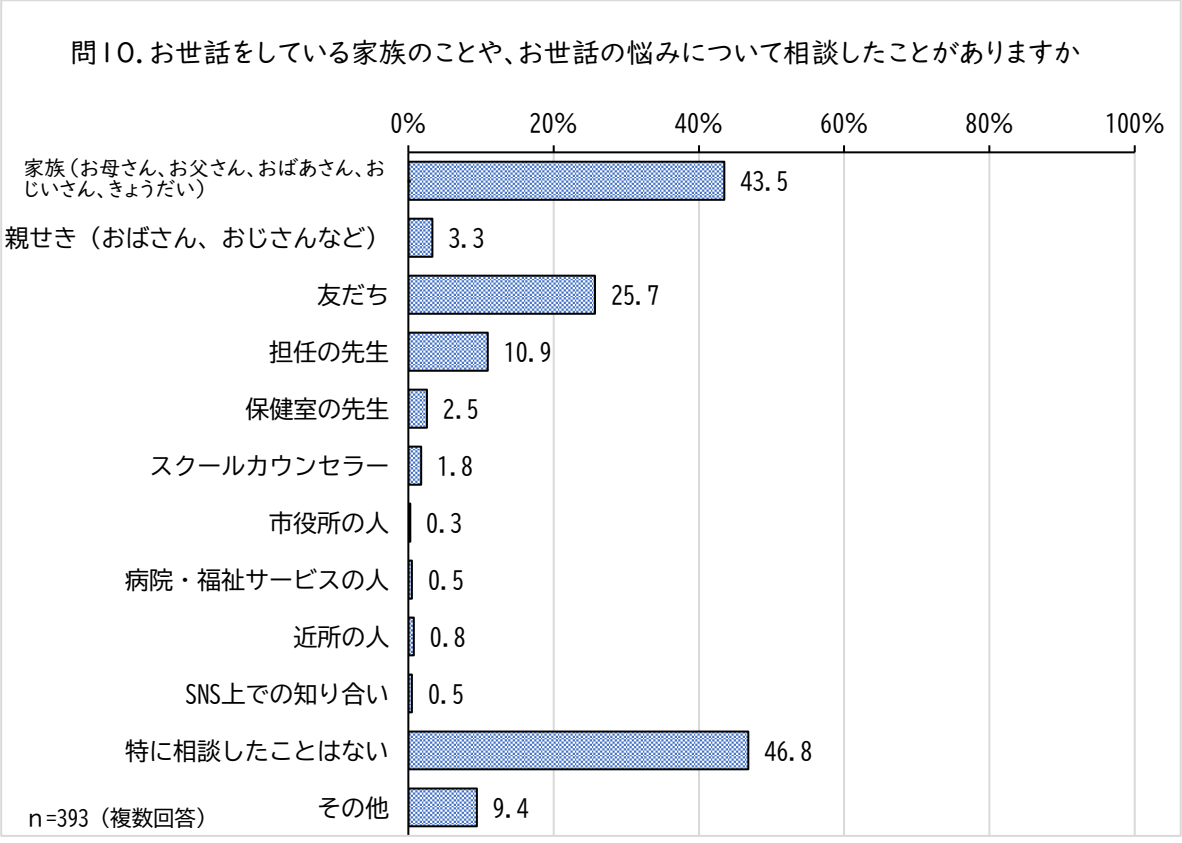


「満足している」（43.5%、171 人）や「何も感じていない」（28.8%、113 人）が合わせて 70%を超え 、ポジティブまたはどちらでもない感情を持つ児童が多くなっています。

一方で、「やるしかない」（26.5%、104 人）や「いやだ」（6.1%、24人）、「体がきつい」（4.1%、16）といった心身の負担を抱える児童もいます。

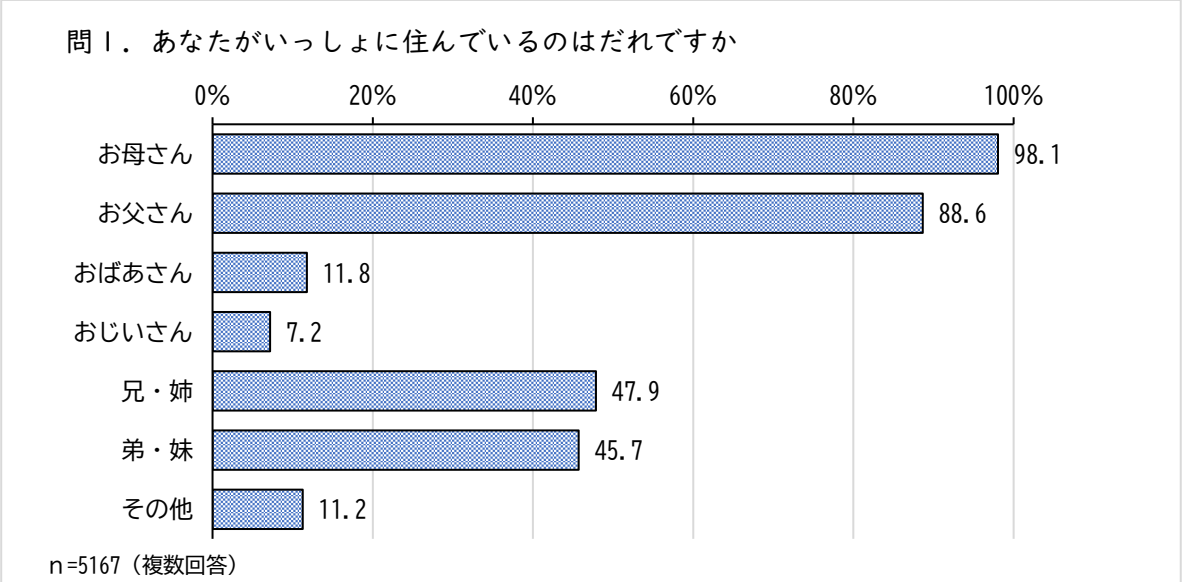


お世話をしている児童の78.4%(308 人)が、母親といっしょにやる、手伝ってくれると回答しました。また、父親(50.6%、199 人）や兄弟姉妹(42.2%、166 人）からのサポートも高くなっています。「だれもいない」と回答した、孤立した状況になっている可能性のある児童も 9.9%(39 人)いました。

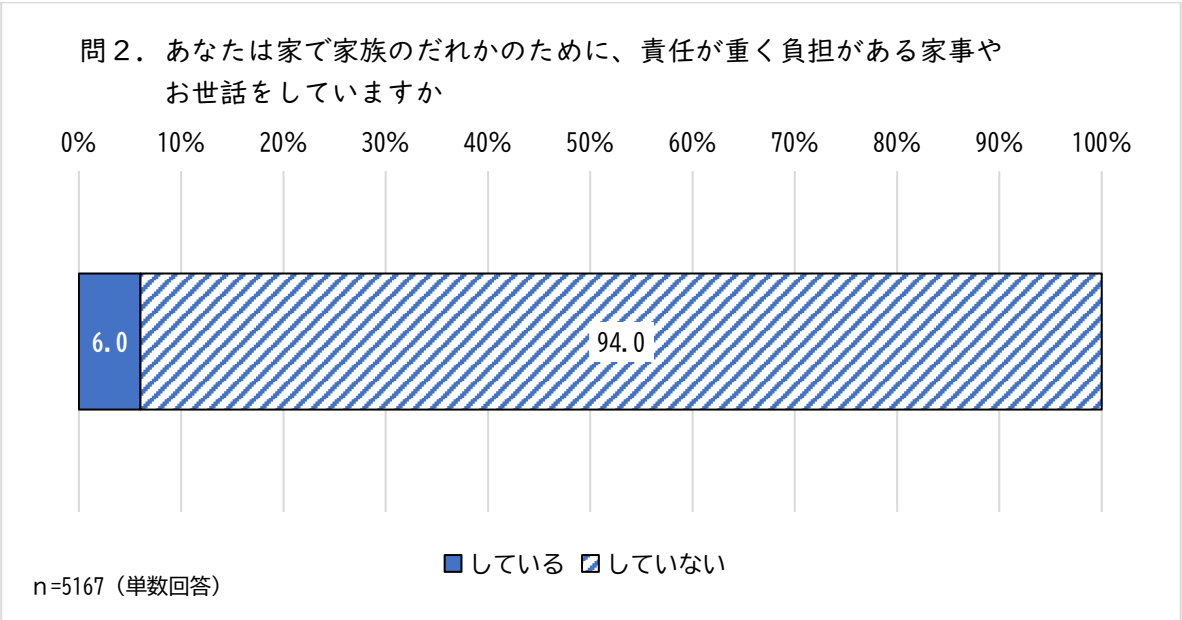


全体の 46.8%(184 人)が「特に相談したことはない」と回答しています。家族(43.5%、171 人）や友だち(25.7%、101 人）のほか、担任の先生(10.9%、43 人)や保健室の先生(2.5%、10 人）といった身近な大人も相談先となっています。

■中学1年生～3年生

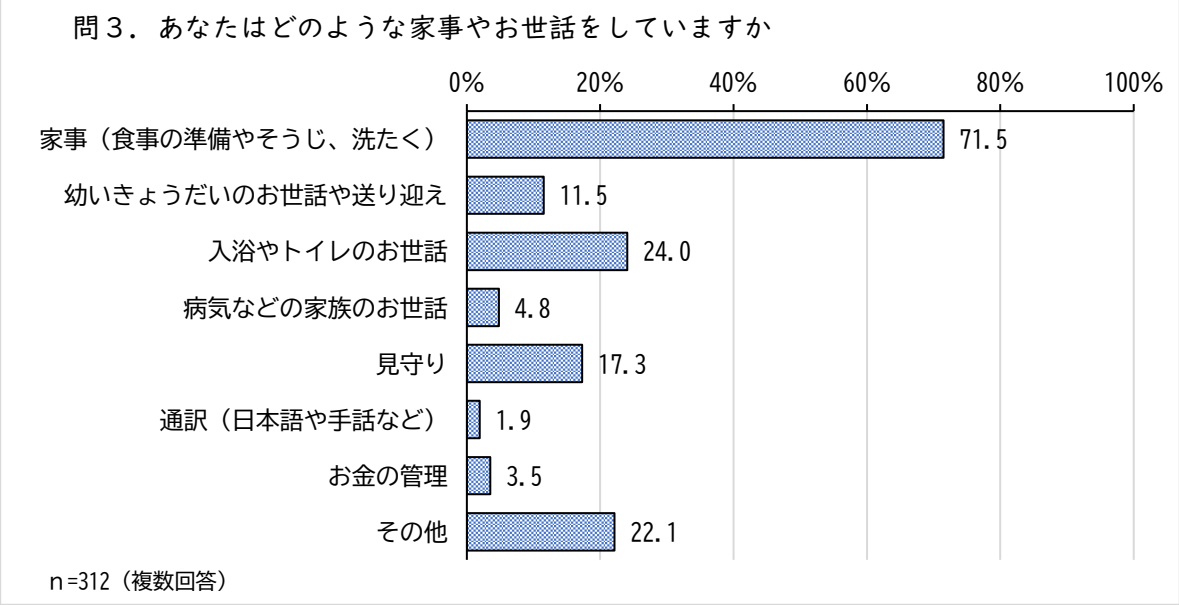


中学1年生～3年生の生徒の同居家族は、両親、特に「母親」(98.1%)と「父親」(88.6%)が中心となっています。また、「兄や姉」(47.9%)と「弟や妹」(45.7%)も顕著で、兄弟姉妹がいる生徒が約半数を占めています。



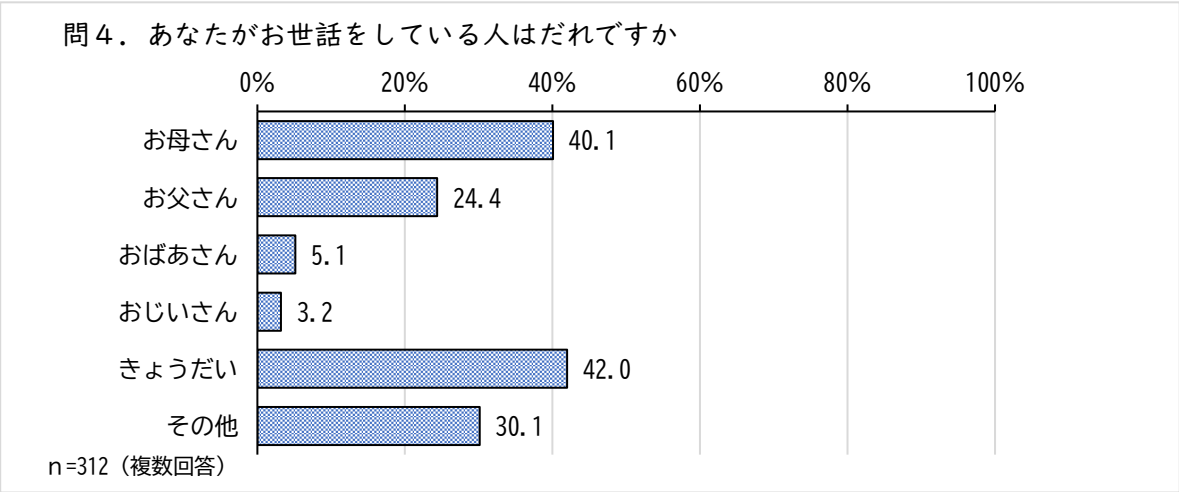
全体の6.0%(312 人)の生徒が、家族のために家事やお世話をしていると回答しました。これは、中学1年生～3年生の約 17 人に 1 人が何かしらかのかたちで家族の家事やお世話に関わっていることになります。

以下の設問は、家事やお世話をしていると回答した 312 人に行いました。

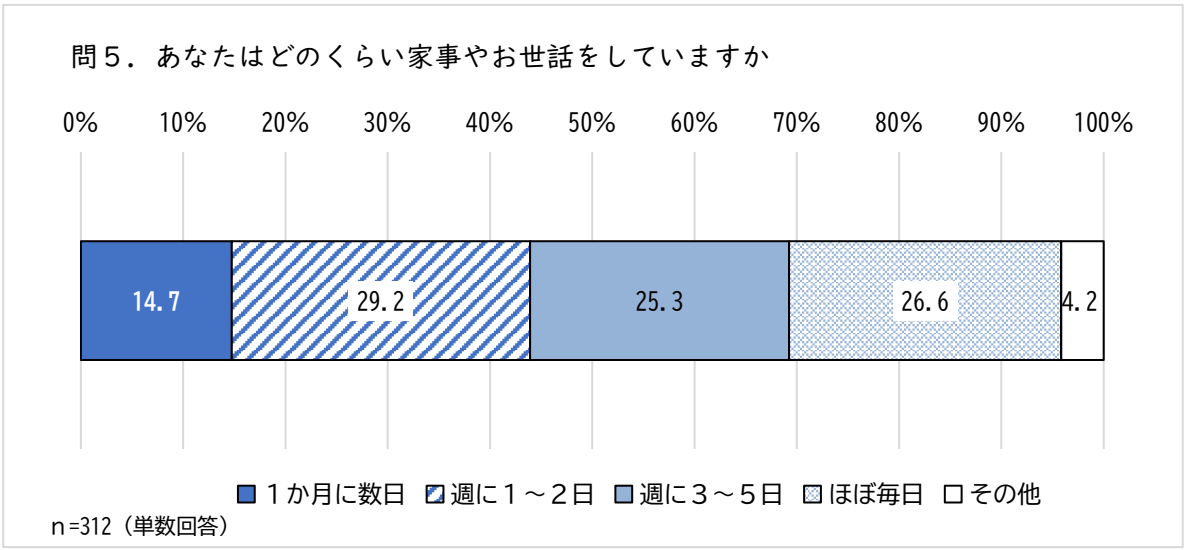


お世話の内容のうち、「家事（食事の準備やそうじ、洗濯）」が 71.5%（223 人）と多くなっており、そのほか「入浴やトイレのお世話」（24.0%、75 人）や「見守り」（17.3%、54 人）、「幼いきょうだいのお世話や送り迎え」（11.5%、36 人）といったものが主になっています。

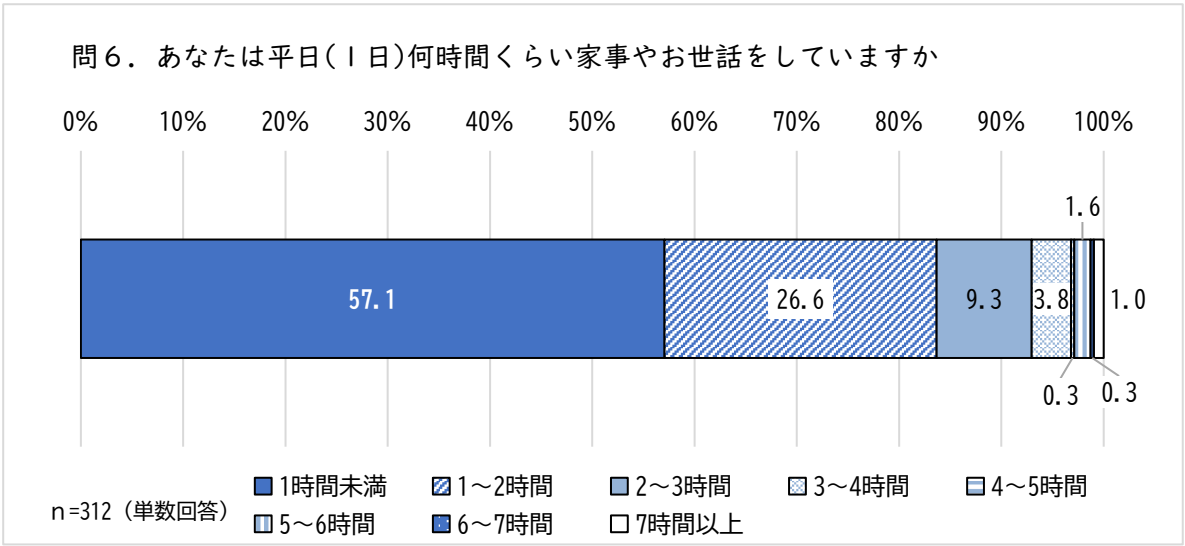
これらの結果では、中学1年生～3年生が担っているのは、日常的な家事が中心となっています。



お世話の対象は「きょうだい」（42.0%、131 人）が最も多く、次いで「母親」（40.1%、125 人）、「父親」（24.4%、76 人）となっています。生徒が親の代わりにきょうだいの面倒を見る、見守りをする、あるいは親自身の家事等を担うケースがあげられます。

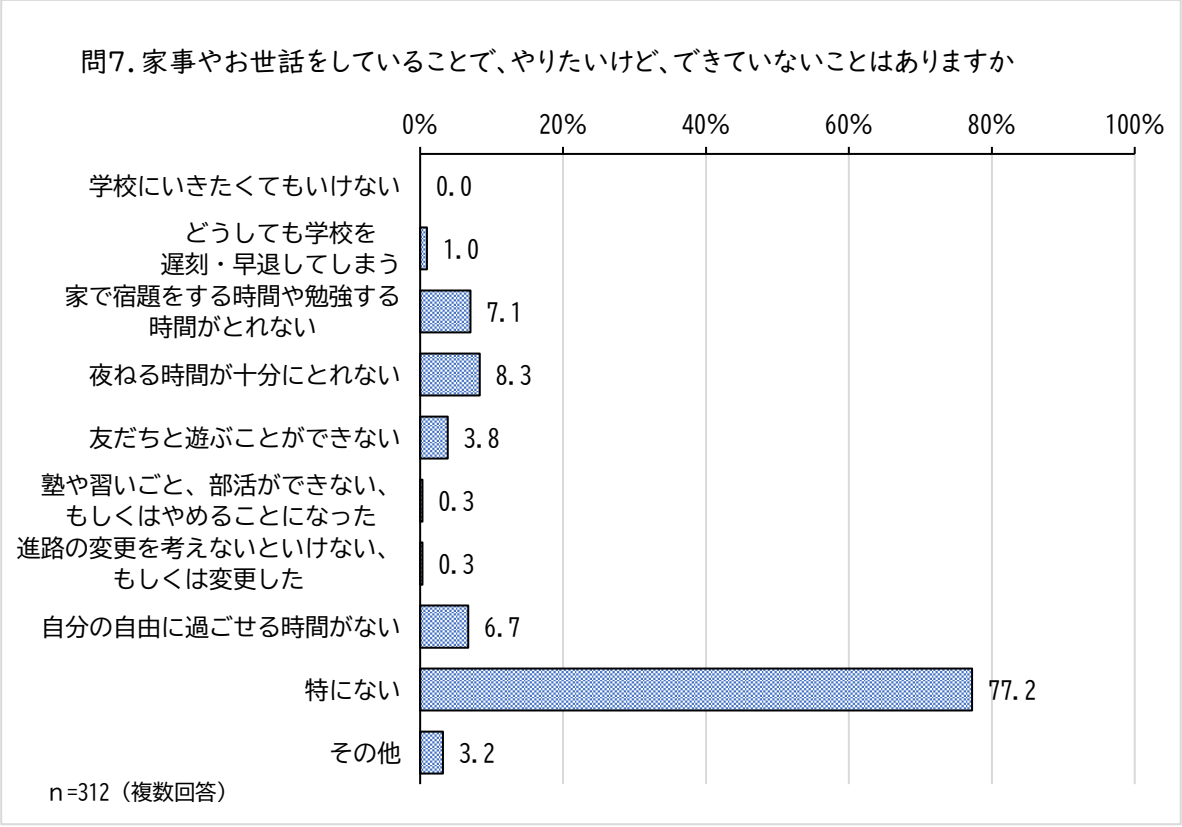


お世話をしている生徒のうち、およそ４人に１人(26.6%、83 人)が「ほぼ毎日」家事やお世話をしていると回答しています。1日に行う時間数が少なく、お手伝いの要素が強いものも含まれている可能性がありますが、日常的な役割になっていることがうかがえます。

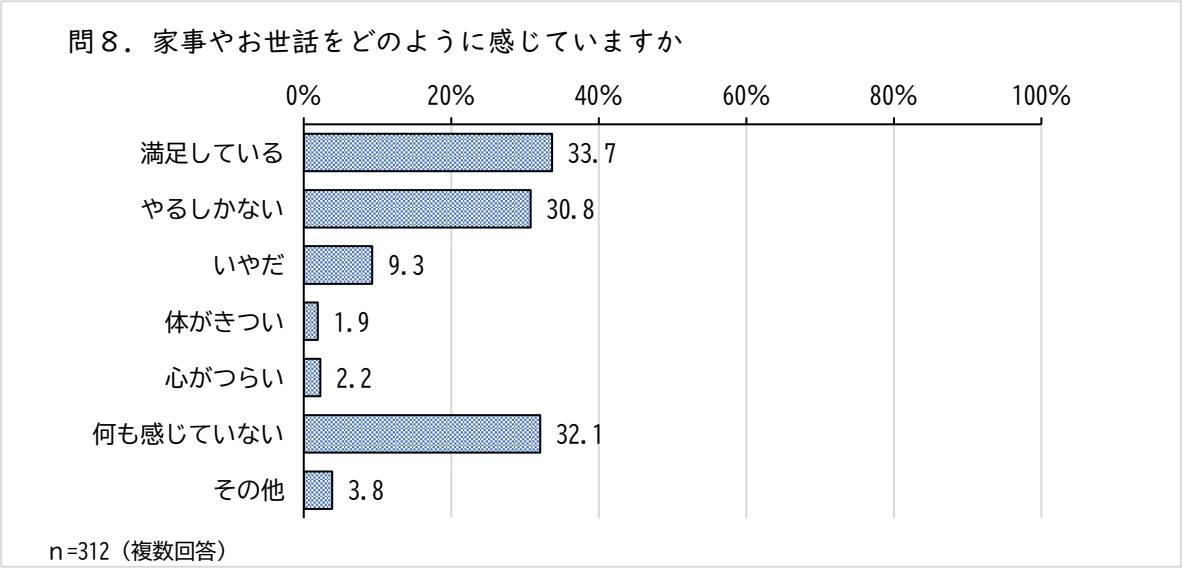


最も多い回答は「1 時間未満」(57.1%、178 人)でしたが 、「1～2 時間」と回答した生徒は 26.6%(83 人)いました。一方で、お手伝いやお世話に費やしている時間が2時間以上の生徒は 16. 3%(51 人)になっています。

また、一部の生徒は「6～7 時間」(0.3%、1人) や「7 時間以上」(1.0%、3 人) と回答しており、個々の負担の程度には大きな開きがありました。

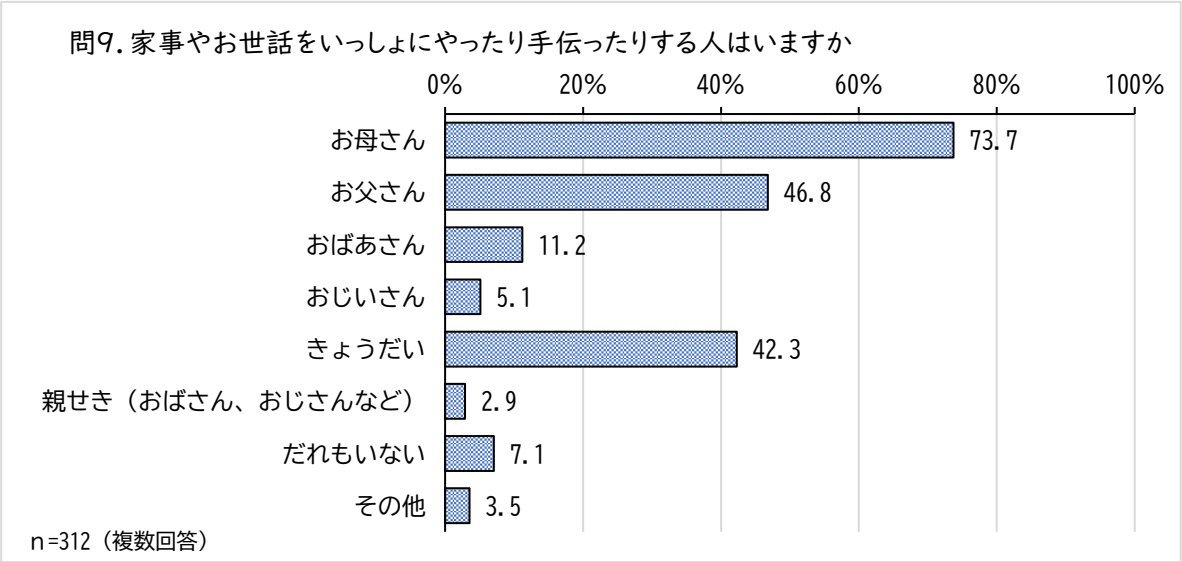


全体の 77.2%(241 人)が「特にない」と回答しています。一部の生徒は「夜ねる時間が十分にとれない」(8.3%、26 人)、「家で宿題をする時間や勉強する時間がとれない」(7.1%、22 人）、「自分の自由に過ごせる時間がない」(6.7%、21 人)といった何かしらの困難を感じています。

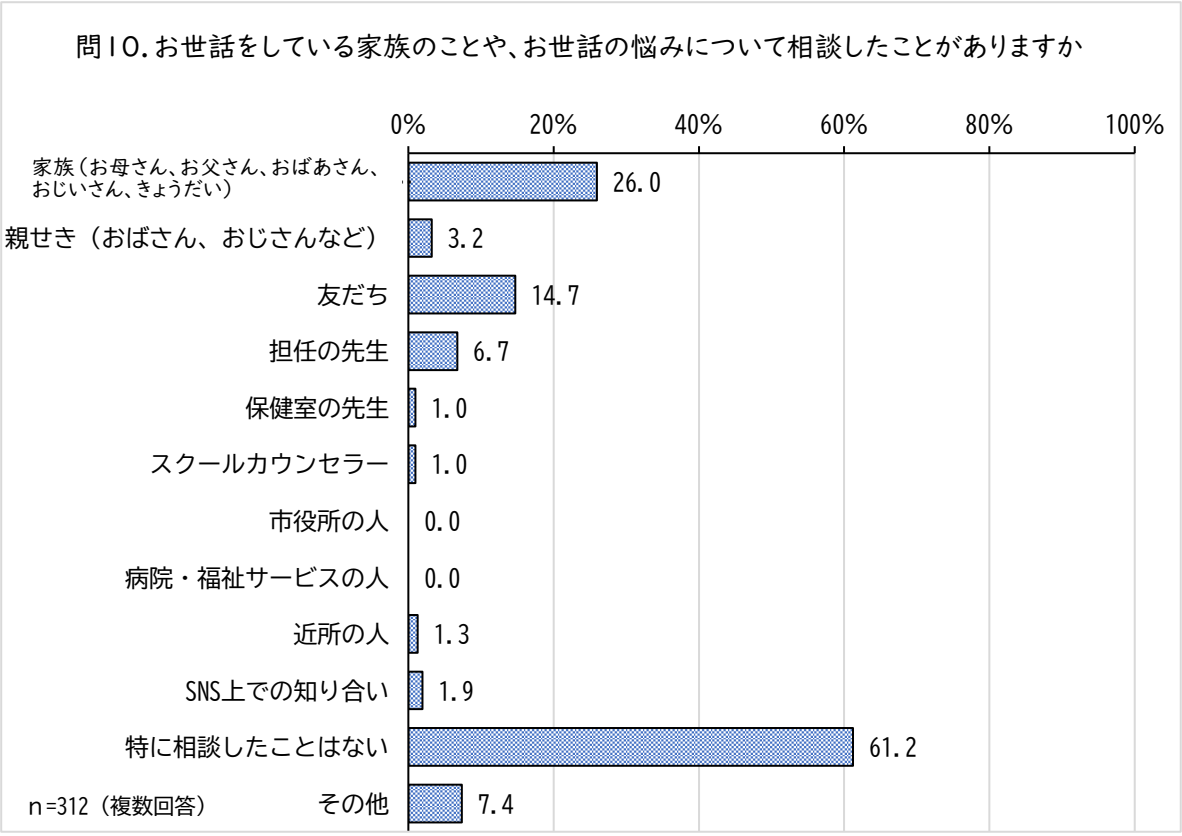


「満足している」(33.7%、105 人)、「何も感じていない」(32.1%、100 人)が合わせて65.8%(205 人)で 、どちらでもないまたはポジティブな感情を持つ生徒が多くなっています。

一方で、「やるしかない」(30.8%、96 人）や「いやだ」(9.3%、29 人）、「心がつらい」(2.2%、7 人）といった心身の負担を抱える生徒もいます。



お世話をしている生徒の73.7%(230 人)が、母親といっしょにやる、手伝ってくれると回答しました 。また、父親(46.8%、146 人) や兄弟姉妹(42.3%、132 人) からのサポートも高くなっています。「だれもいない」と回答した、孤立した状況になっている可能性のある生徒も 7.1%(22 人)いました。



全体の 61.2%(191 人)の生徒が「特に相談したことはない」と回答しています。家族(26.0%、81 人) や友だち(14.7%、46 人) のほか、担任の先生(6.7%、21 人)や保健室の先生(1.0%、3人) といった身近な大人も相談先となっています。

■考察

今回の調査では、小中学生とも回答率が昨年度より約5%増加し、引き続き高い回答率となりました。

「家族の誰かのために家事やお世話をしている」と回答した児童の割合は、小学5年生・6年生で10.2%（昨年度より 4.0%減少）、中学1年生～3年生で6．0%（昨年度より 10.5%減少）という結果となり、お世話をしている割合は減少となりました。回答した児童・生徒のうち、家事やお世話を行っている時間が1時間未満と回答したのはそれぞれ 50%を超えており、内容としては日常的な家事が多い傾向となっています。

また、お世話の内容としては、昨年度と同じく、家事、入浴やトイレ、見守り、幼いきょうだいへの関わりが多く、その中で一部のこどもに過度な負担がかかっていることがわかりました。

お世話に関する相談については、「特に相談をしたことがない」と回答した児童が 46．8%、生徒が 61．2%おり、いずれも昨年度より約10%減っていることから、ヤングケアラーの周知・啓発によって、相談ができているこどもが少しずつ増えている状況が伺えます。また、お世話をしている時間や日数が少なく相談の必要性を感じていないこどもがいる一方、問題を一人で抱え込んでいるこどもがいる可能性があります。

今後、お世話の日数や時間数、心身の負担感などをもとに、学校へ結果のフィードバックを行いながら、個別具体的な支援の必要性を確認していきます。

ヤングケアラーのような、日常的に家族の介護や世話を担っているこどもたちは、学業や友人関係、進路選択などに影響を受ける場合が少なくありません。引き続き教育と福祉が連携し、こどもたちが安心して学び、成長できるよう、こどもや家庭へのアプローチを行います。

こども育成相談課こども家庭相談担当
（こども家庭センター）
発　行　令和８年11月
電　話　0467－81－7170（直通）